

「不適切にもほどがある!」!?

澤 由紀子(立命館大学教職研究科准教授)

この冬流行ったテレビドラマに「不適切にもほどがある!」があった。番組ホームページによると「昭和のダメおやじの『不適切』発言が令和の停滞した空気をかき回す!」という内容だそうだった。昭和の時代のコンプライアンス意識が低い体育教師がひょんなことで令和の時代にタイムスリップし、コンプライアンスの意識に縛られた令和の人々に考える「キッカケ」を与えていく、という筋書きであった。もともと学園ドラマは実際の学校で勤めていた身からすれば現実味がなく、あまり好きではなかった。案の定、初回からテスト監督中にたばこを吸いながら採点をするという、いくら何でもあり得ない場面があり(そもそもタイムスリップがあり得ないのだが…)、拒否感が先に立ってしまいストーリーに乗り切れずに終わるかと思われた。ところが、主人公が令和と昭和と行き来する際に、昭和の「常識」と令和の「常識」が対比され、40年間に起こった世の中の意識の変化を改めて考えさせられ、興味深く最終回まで見てしまった。(学園ドラマでもなかった。)確かに、セクハラをセクハラと言えず(気づかず!)、パワハラをパワハラとも言えなかった(気づかなかった!)時代に比べて確かに時代は変わってきていることを実感したものである。

だが、そんな令和の時代なのに、である。今年の今頃は芸能事務所の創業者が長年にわたって所属タレントたちに加害を繰り返していたことが公になり、マスコミもこの問題について連日報道をした。しばらくはこの話題で持ちきりであったが、事務所が保障問題に対応するための新たな会社に変わってからは、ほとんど報道されなくなった。また、それまで多くの番組で見られていた所属タレントたちも、個人で活動している一部の人気者以外テレビで見ることがなくなった。先日、NHKが引き続き当該会社所属タレントの出演を見送るという記事を読み、久しぶりにその話題を目にした。またコンプライアンスというものを実感したものだ。

この間、ファンならずとも被害に遭った少年たちやその周囲の人たちのことを思い、いたたまれない気持ちになった人は多かったのではないだろうか。私もその一人である。しかし、私の心を重くしたのはこの問題が今年の春初めて明らかになったわけではないということだった。最初に被害が訴えられたのは35年前、1988年である。その後、民事裁判で加害行為が認められたにもかかわらず、マスコミが大きく問題視することも事務所が対応に乗り出すこともなかった。今年の3月にイギリスのテレビ番組で報道されるまでは。なぜ一人の人間の、明らかに人権侵害とも言える行為が長期にわたり、大規模にまかり通ってきたのか…。

マスコミは今更ながら、様々な分析をしてみせた。日本の芸能界の構造の問題、行為の「見返り」、加害者の異常性、加害行為を加害と思わせない“手なづけ”等々。それまで大きな問題にしなかったのに、である。

この事件に限ったことではなく、様々な事件が起こっているのだが、私は学校教育でもっとできることはないのだからと思ってしまう。たまたま担当となった先生にその意識が有るか無いか委ねることではなく、体系的な「教育」として幼いときから自分を大切にすること、具体的な考え方や守る手段を、発達段階に即して教えるべきではないのかと思ってしまう。男性にとっても女性にとっても、である。性教育、人権教育、防災教育等々、学校教育に盛り込まれているはずであるが、本当に充分なのだろうか。日本人が「水と安全はただだ」と思っている、と言われて久しいが、どちらも決してただではないのは自明のことである。子どもたちが事故や事件に巻き込まれる危険性はますます高まっている。もはや大人が守るだけでなく子どもたちが自分自身を守る術を身につけることは、時代のせいだと嘆くものではなく、本来はずっと以前から取り組むべきことではなかったのだろうか。